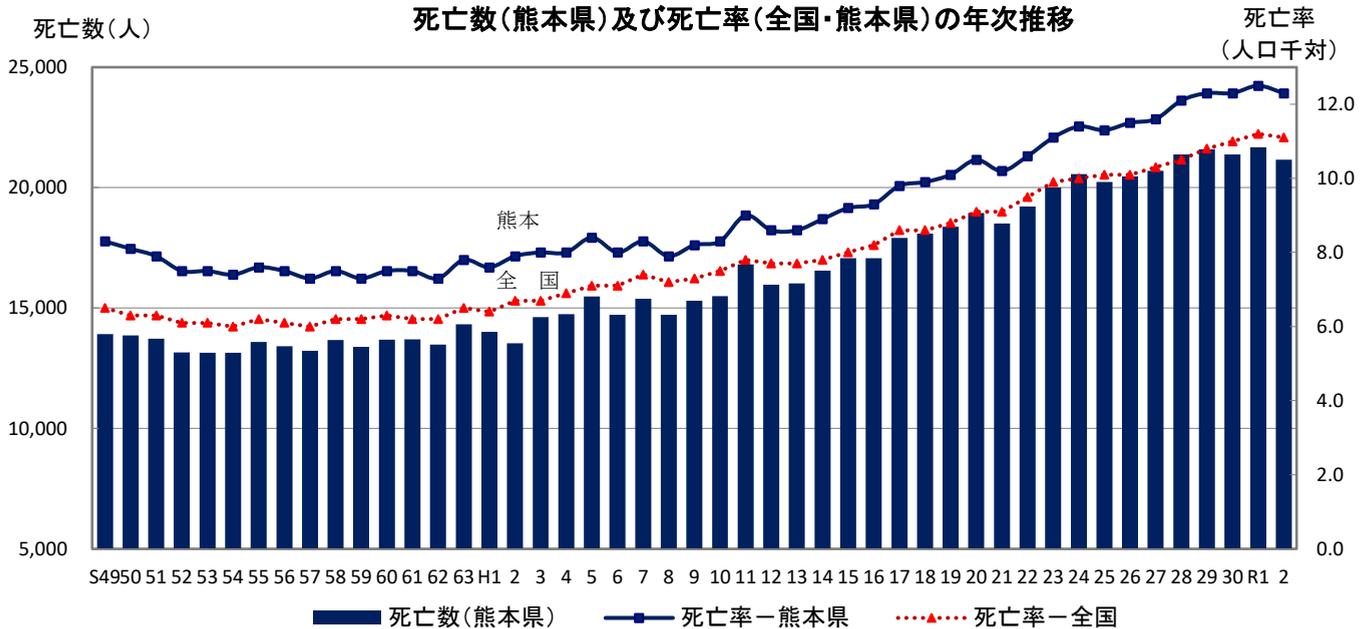


3. 死 亡

(1) 死亡数が、出生数を8,145人上回る

令和2年の本県の死亡数は21,156人で、死亡率（人口千対）は12.3で前年より0.2ポイント減少した。また、全国の死亡率（人口千対）は11.1で、前年より0.1ポイント減少した。

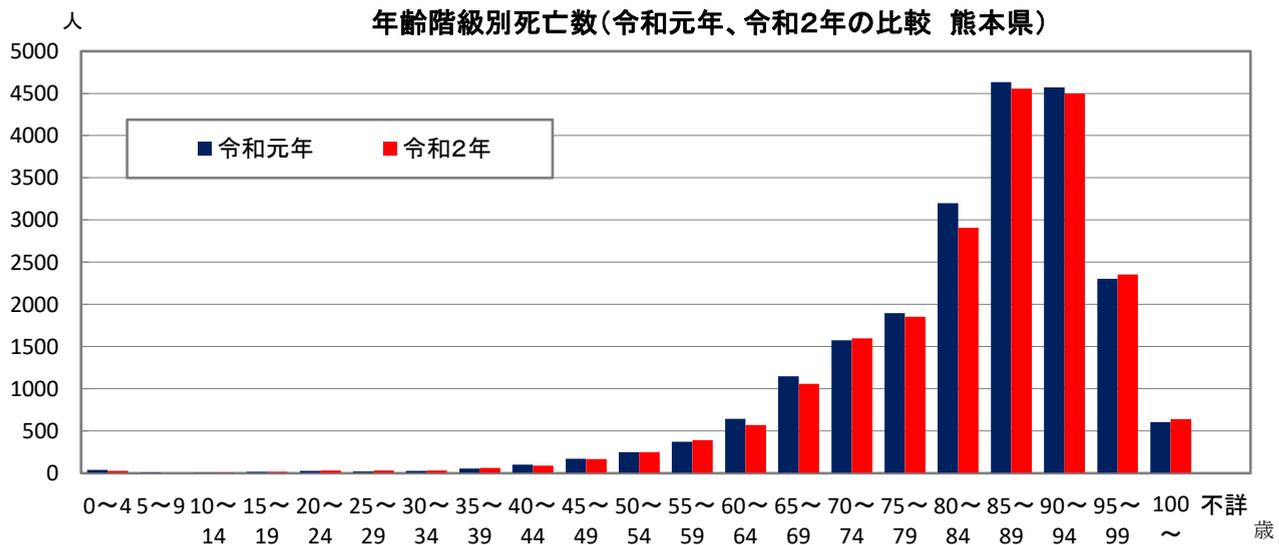


資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(2) 令和2年の死亡数は、前年に比べ514人減少

本県の令和2年の死亡数は、前年より514人減少した。前年と比較すると、年齢階級により増減は様々だが、全体で見ると0.2ポイントの減となっている。

また、最も死亡数の多い階級は、85～89歳の4,558人、次いで多い階級は90～94歳の4,498人であり、この2階級をあわせると、全体死亡数21,156人の42.8%を占めている。



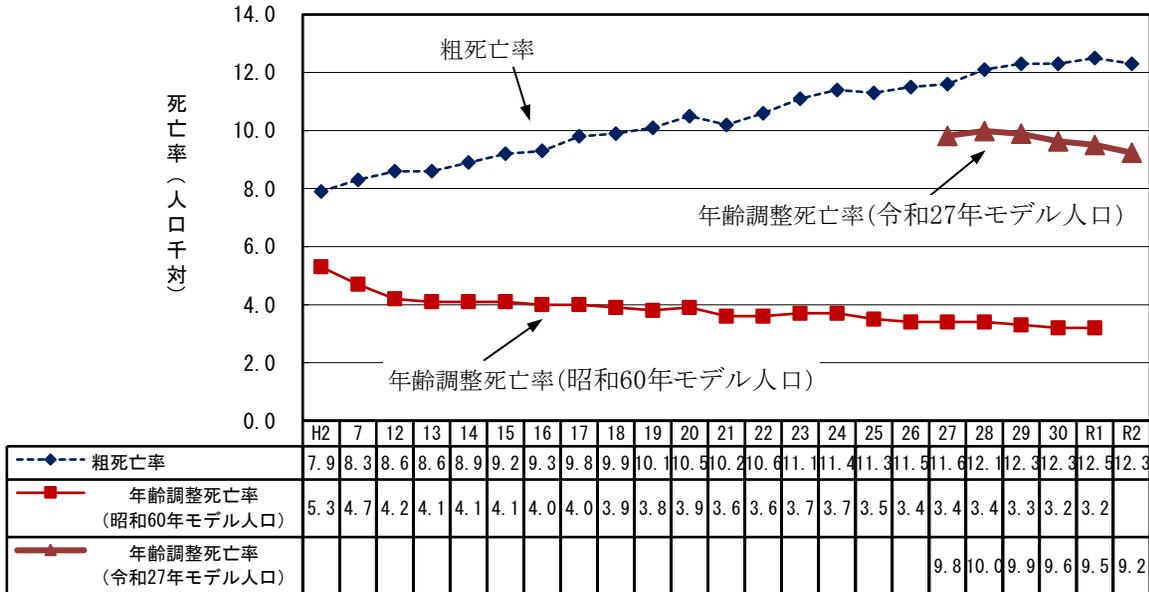
資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(3) 年齢調整死亡率は9.2（人口千対）

本県の令和2年の粗死亡率（人口千対）は、12.3で前年より0.2ポイント減少した。平成27年全国モデル人口を基準に人口構成を補正した令和2年の「年齢調整死亡率」は、前年より0.3ポイント減少し9.2だった。

※「年齢調整死亡率」の算出方法については、本書の巻末「用語等の説明」参照。

粗死亡率と年齢調整死亡率の推移（熊本県）

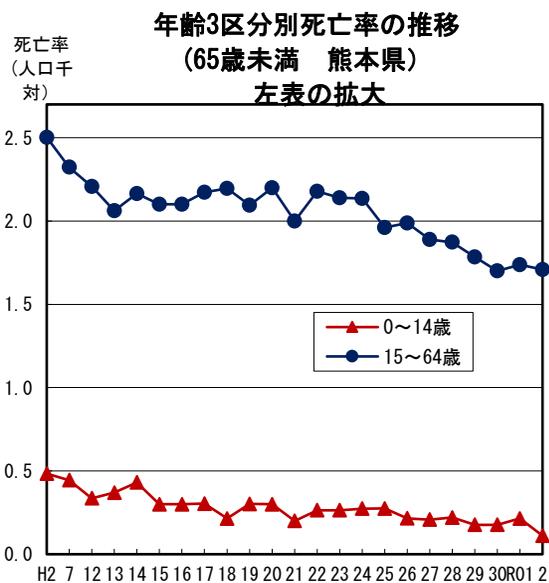
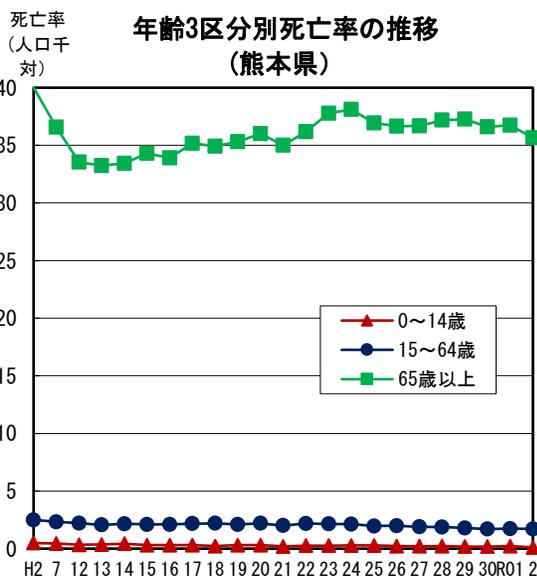


- 注) 1) 年齢調整死亡率の基準人口は、令和2年に昭和60年モデル人口から平成27年モデル人口に変更された。
 2) 粗死亡率は、年齢調整死亡率と比較するために粗死亡率と表現したが、単に死亡率と呼んでいるものである。

資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(4) 年齢3区分別死亡率は、65歳以上が1.1ポイントの減

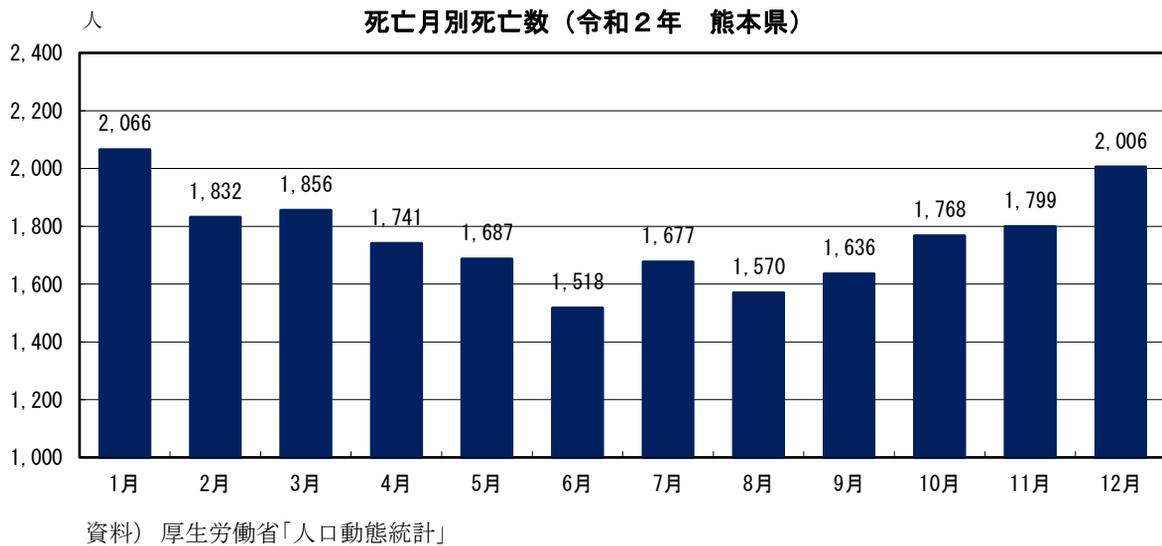
死亡率（人口千対）の年次推移を年齢階級3区分別にみると、令和2年は0～14歳が0.1で0.1ポイントの減、15～64歳が1.7で前年と同率、65歳以上が35.7で1.1ポイントの減であった。



資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(5) 死亡数が多い冬期

死亡数を月別にみると、寒くなる11月から3月にかけて多くなっている。



(6) 全国より高い主な死因別の死亡率（人口10万対）

令和2年の主な死因別の死亡率（人口10万対）を全国値と比較すると、主な死因では自殺を除き本県の方が高くなっている。

主な死因による死亡率（人口10万対） 熊本県と全国との比較

令和2年

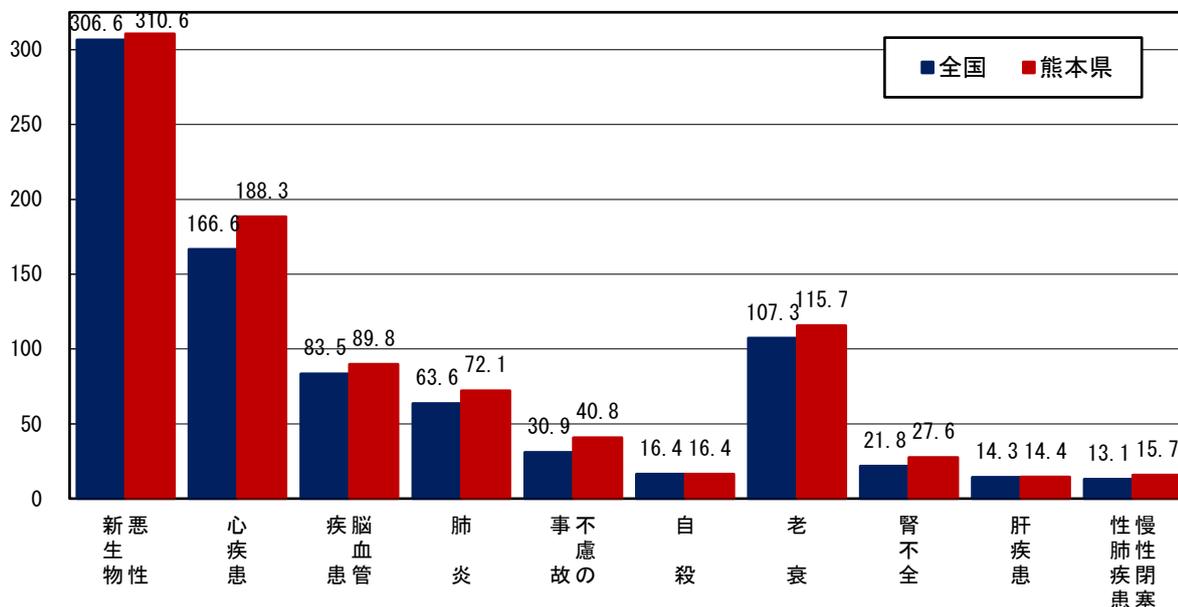
死 因	熊本県 死亡数	熊本県 死亡率	全国順位 (降順)	全国 死亡率	全国1位 (降順)	全国47位 (降順)
悪性新生物	5,349	310.6	30位	306.6	秋 田 県 432.9	沖 縄 県 226.2
心疾患	3,242	188.3	19位	166.6	高 知 県 243.4	沖 縄 県 115.3
脳血管疾患	1,547	89.8	28位	83.5	岩 手 県 155.9	滋 賀 県 63.2
肺炎	1,241	72.1	21位	63.6	徳 島 県 108.9	沖 縄 県 31.8
不慮の事故	702	40.8	13位	30.9	高 知 県 49.6	沖 縄 県 16.4
自殺	282	16.4	24位	16.4	岩 手 県 21.3	佐 賀 県 13.4
老衰	1,993	115.7	23位	107.3	山 形 県 179.5	福 岡 県 71.2
腎不全	476	27.6	14位	21.8	高 知 県 37.0	東 京 都 15.4
慢性閉塞性肺疾患	270	15.7	17位	13.1	徳 島 県 19.9	愛 知 県 9.1
肝疾患	248	14.4	22位	14.3	沖 縄 県 23.8	福 井 県 10.9

	熊本県	全国順位	全国	全国1位 (降順)	全国47位 (降順)
65歳以上人口の割合 (R02. 10.1人口推計：総人口)	31.8%	23位	29.1%	秋 田 県 37.7%	沖 縄 県 22.8%

資料) 厚生労働省「人口動態統計」

率
(人口10万対)

主要死因別粗死亡率の県と全国の比較（令和2年）

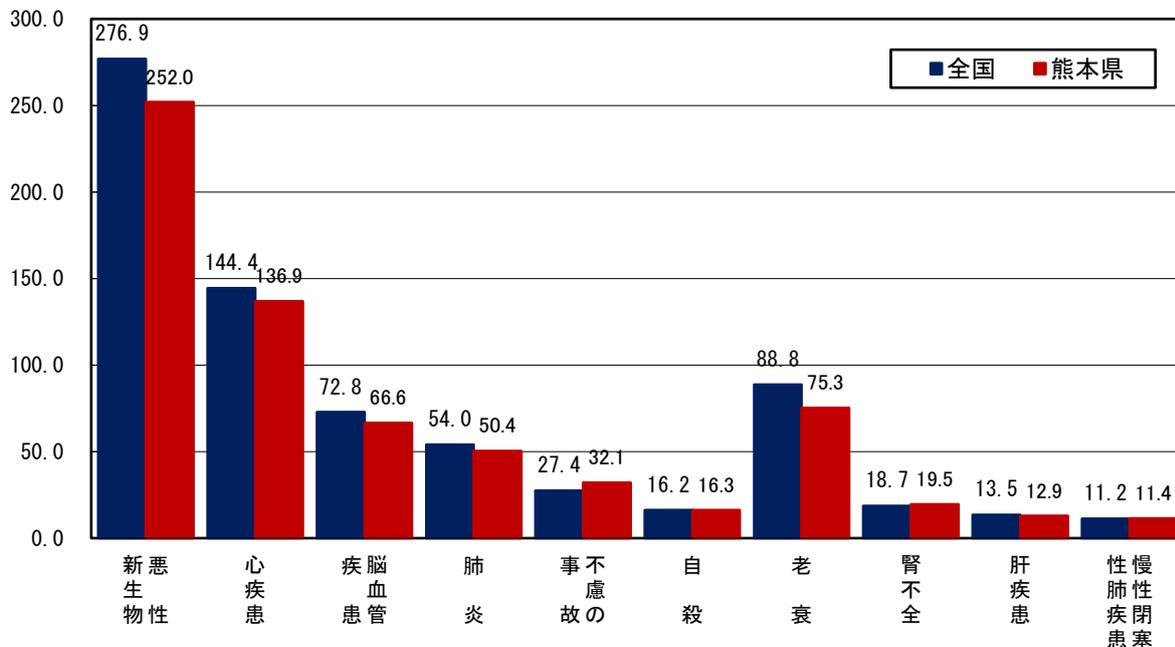


注) 粗死亡率は年齢調整死亡率と比較するために粗死亡率と表現したが、単に死亡率とよんでいるものである。

資料) 厚生労働省「人口動態統計」

率
(人口10万対)

主要死因別年齢調整死亡率の県と全国の比較（令和2年）



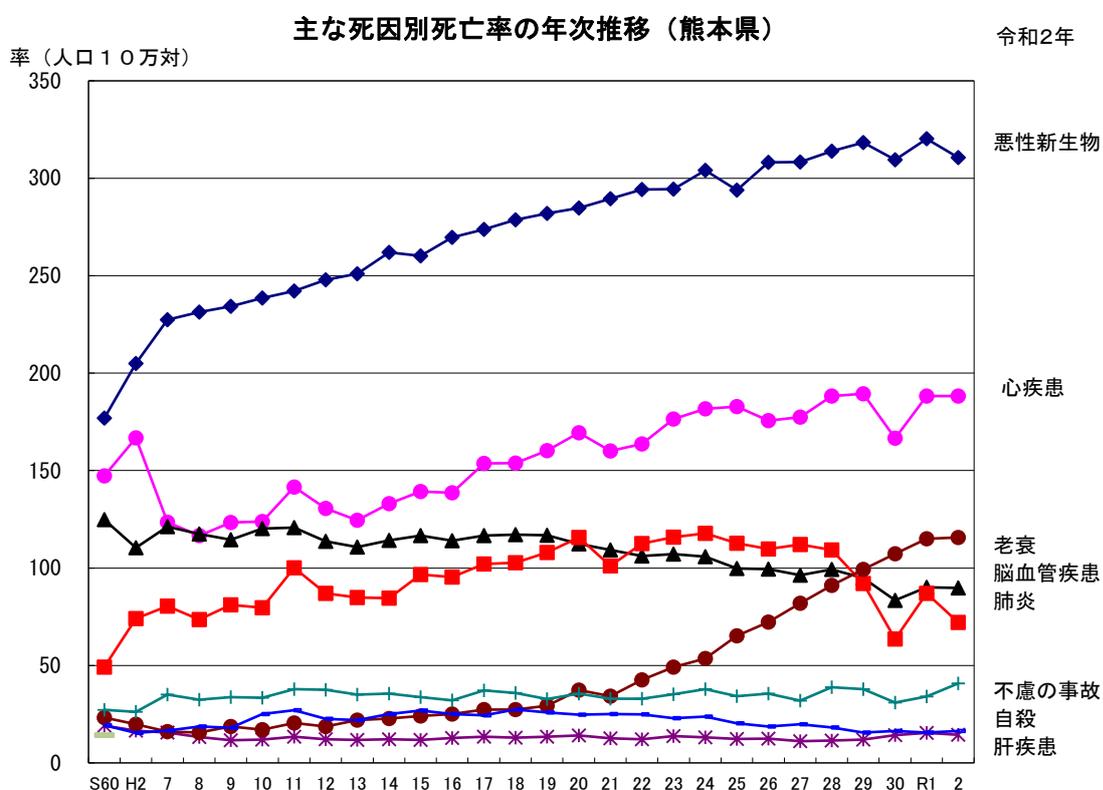
注) 年齢調整死亡率は、平成27年全国モデル人口を基準とした。

資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(7) 令和2年の主な死因別死亡率は、悪性新生物、肺炎等が減少

令和2年の本県の主な死因別死亡についてみると、悪性新生物の死亡数が5,349人で、死亡率（人口10万対）は310.6であり、死亡総数の25.3%を占めて死因順位の第1位となっている。第2位は心疾患、第3位は老衰だった。

なお、平成6年から平成7年にかけての死因別死亡の急激な変化は、国際疾病分類の第10回修正（ICD-10）の影響によるものと考えられる。

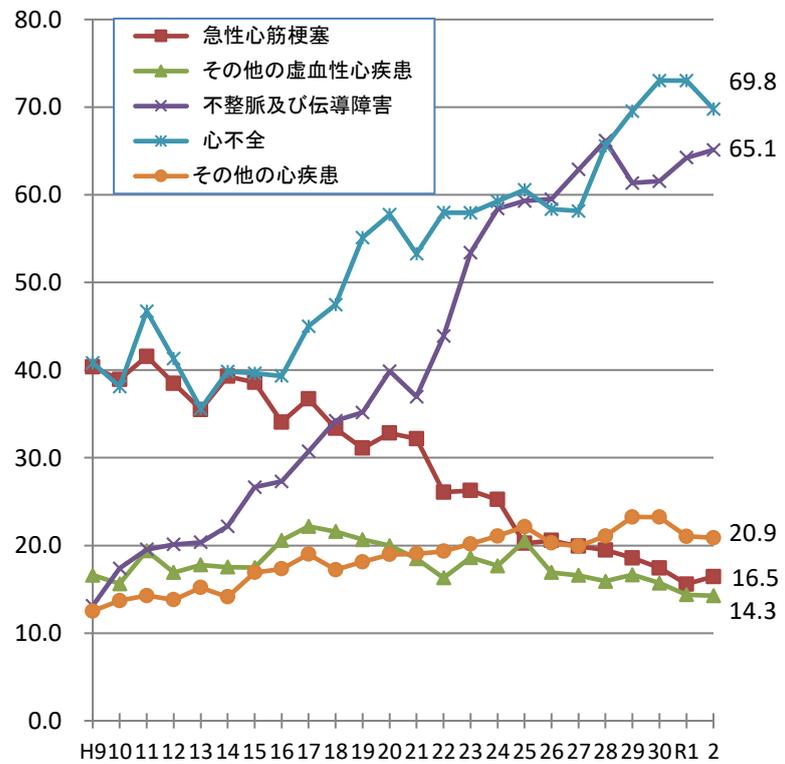


注) 平成7年から疾病分類が変更されたため、「肝疾患」は平成6年までは「慢性肝炎・肝硬変」
資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(8) 心不全が1位

本県の心疾患の種類別死亡率の年次推移をみると、令和2年も心不全が、不整脈及び伝導障害を上回った。

心疾患の種類別死亡率の年次推移(熊本)

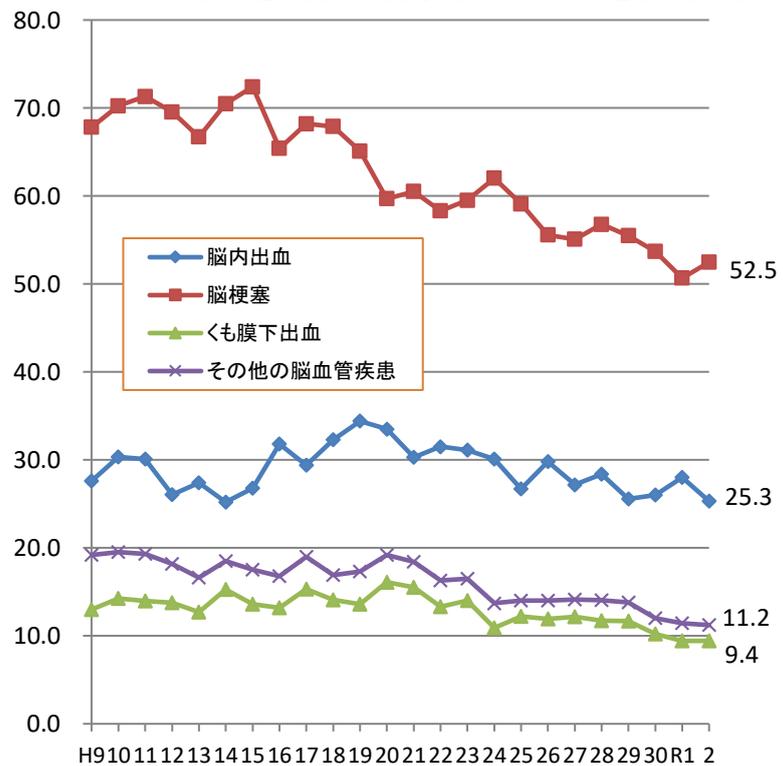


資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(9) 脳梗塞は前年より1.8ポイント増加

本県の脳血管疾患の種類別死亡率の年次推移をみると、令和2年は脳梗塞は前年より1.8ポイント増加、くも膜下出血は横ばい、その他は減少している。

脳血管疾患の種類別死亡率の年次推移(熊本県)



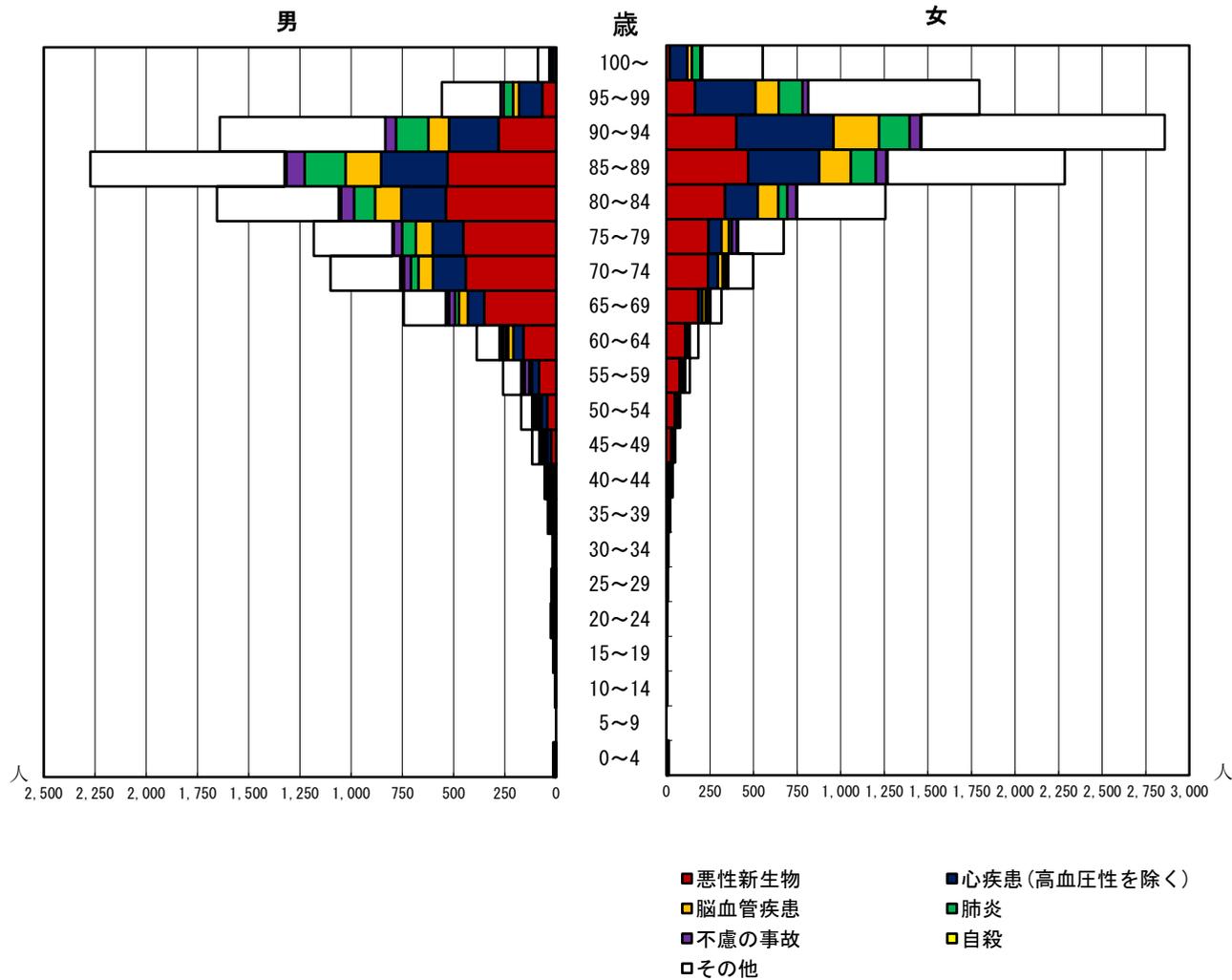
資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(10) 悪性新生物による死亡数は、男性は80歳～84歳、女性は85歳～89歳で最多

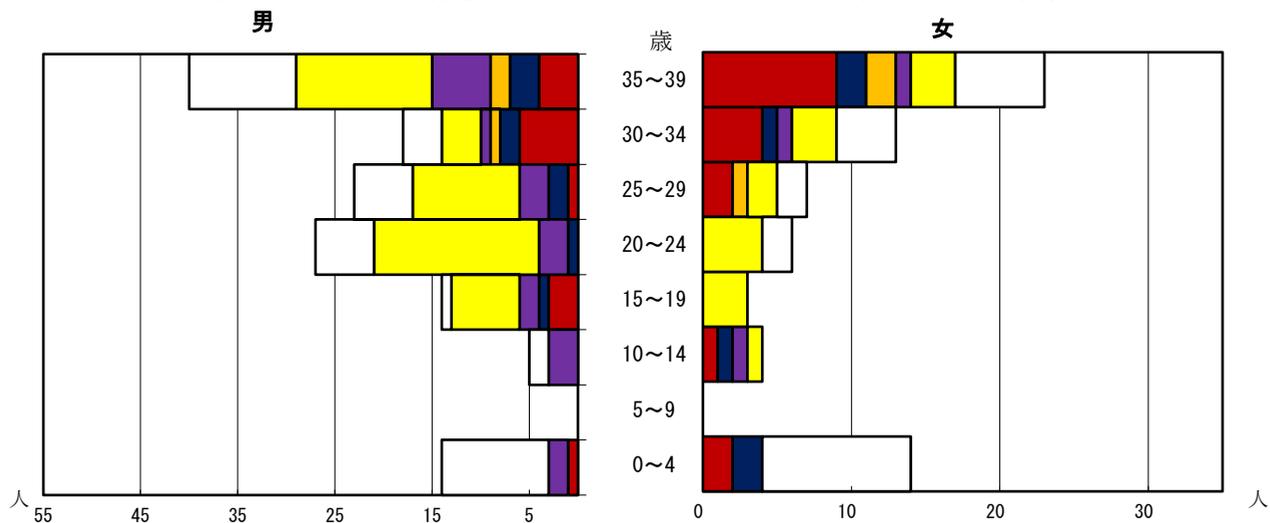
本県の令和2年の死亡数を主な死因別で見ると、全体では男女とも1位悪性新生物、2位心疾患であるが、年齢階級別で見ると、その構成は階級毎に大きく異なる。

また、39歳以下においては、男性の死因の最多は自殺の53人、次いで不慮の事故の20人、女性の死因の最多は悪性新生物の18人、次いで自殺が16人であった。

性・年齢階級別にみた主な死因の死亡数(令和2年 熊本県)

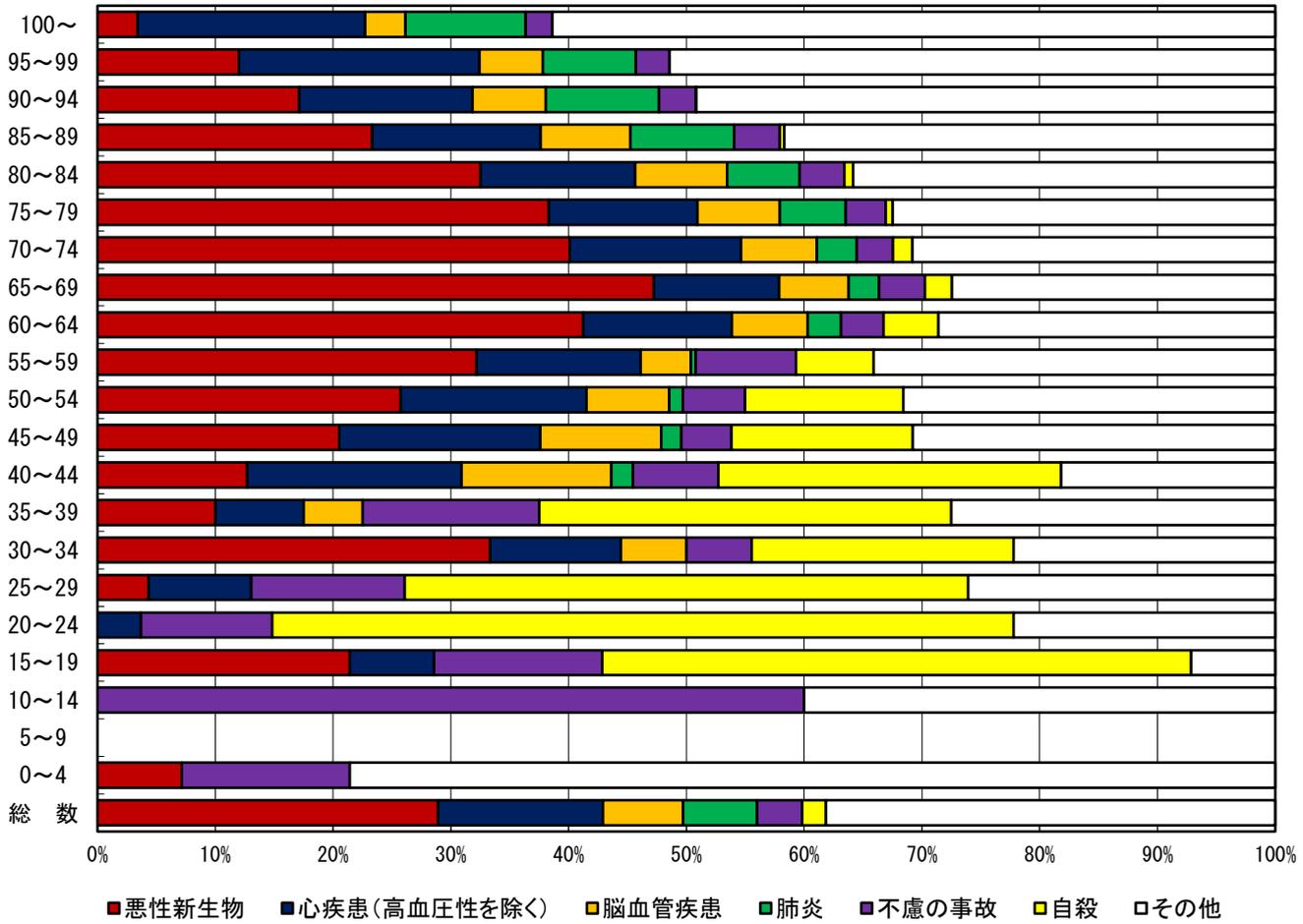


40歳未満の性・年齢階級別にみた主な死因の死亡数(令和2年 熊本県)

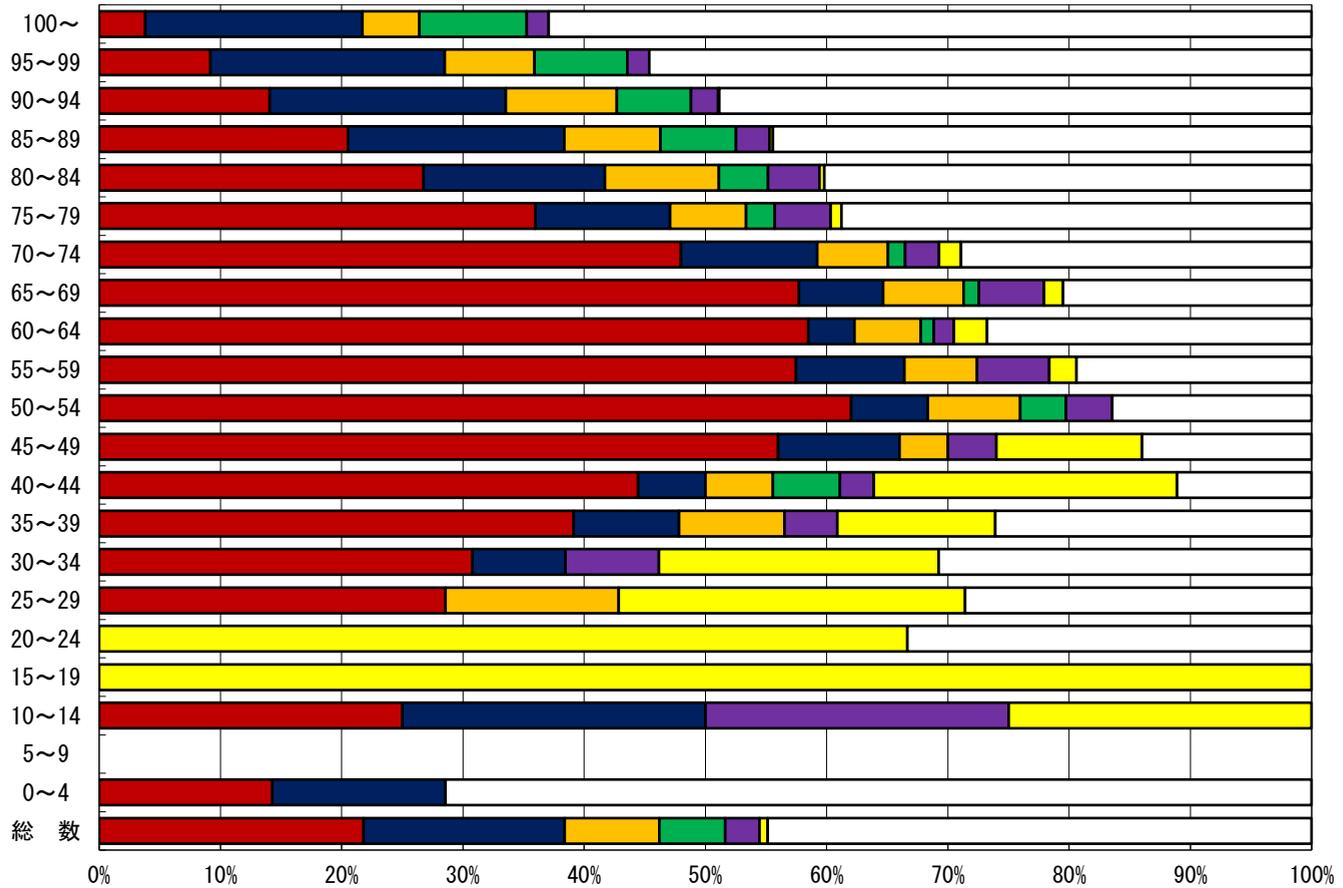


資料) 厚生労働省「人口動態統計」

性・年齢階級別にみた主な死因の構成割合(令和2年 熊本県・男)

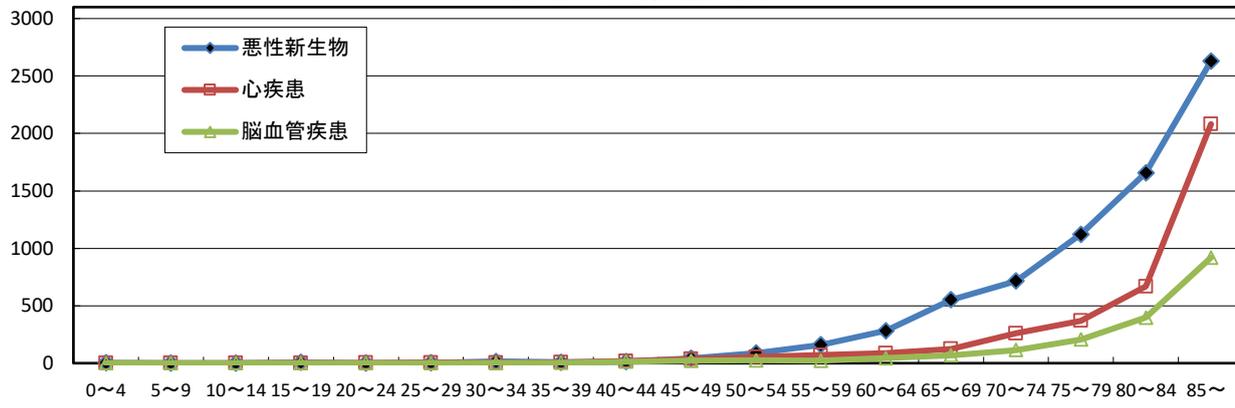


性・年齢階級別にみた主な死因の構成割合(令和2年 熊本県・女)



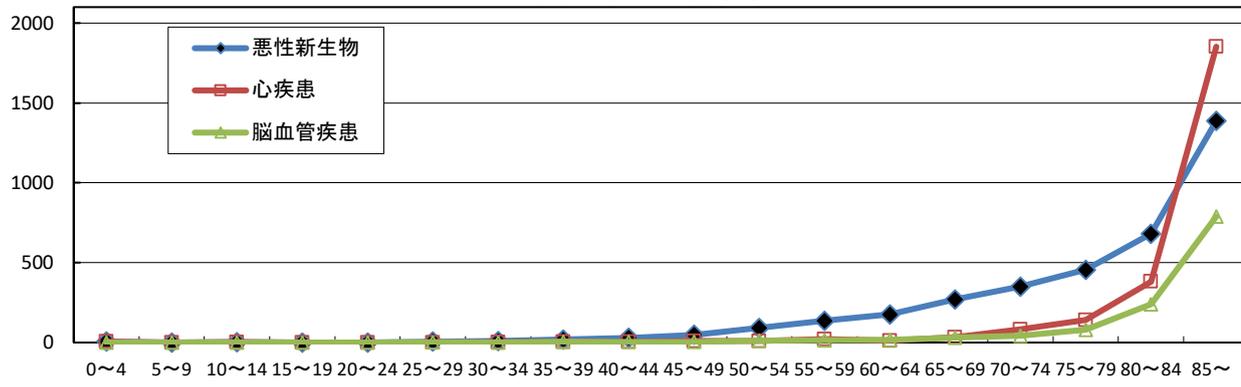
死亡率
(人口10万対)

3大死因の年齢階級別死亡率
(令和2年 男 熊本県)



死亡率
(人口10万対)

3大死因の年齢階級別死亡率
(令和2年 女 熊本県)

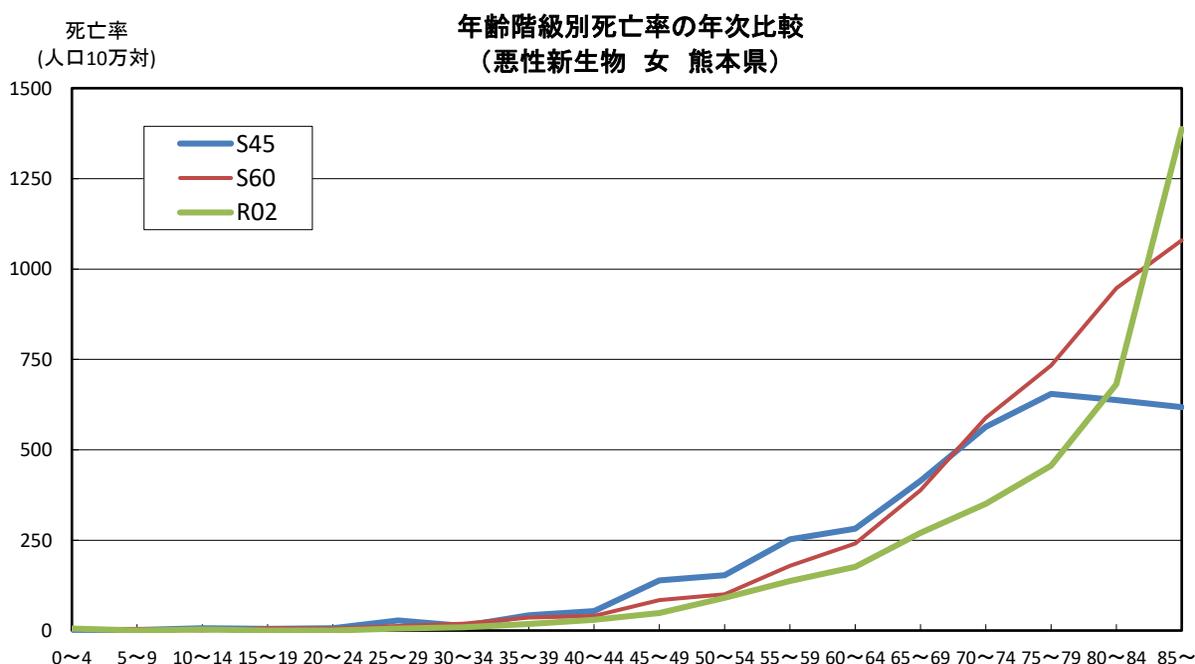
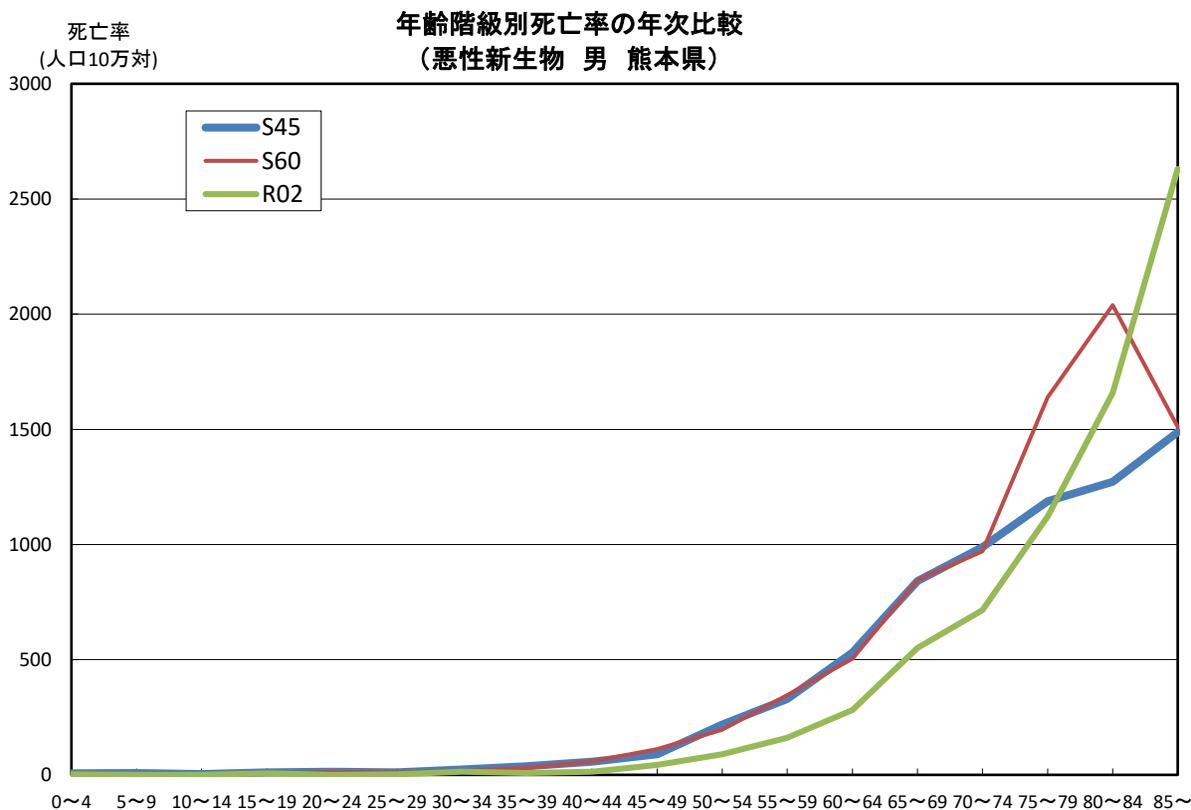


(11) 昭和45年、昭和60年と比較すると心疾患、脳血管疾患は減少、悪性新生物は85歳以上で増加

3大死因の年齢階級別死亡率（人口10万対）を年次別（昭和45年、昭和60年、令和2年）にみると、令和2年の悪性新生物は男女とも85歳以上で大幅に上昇している。

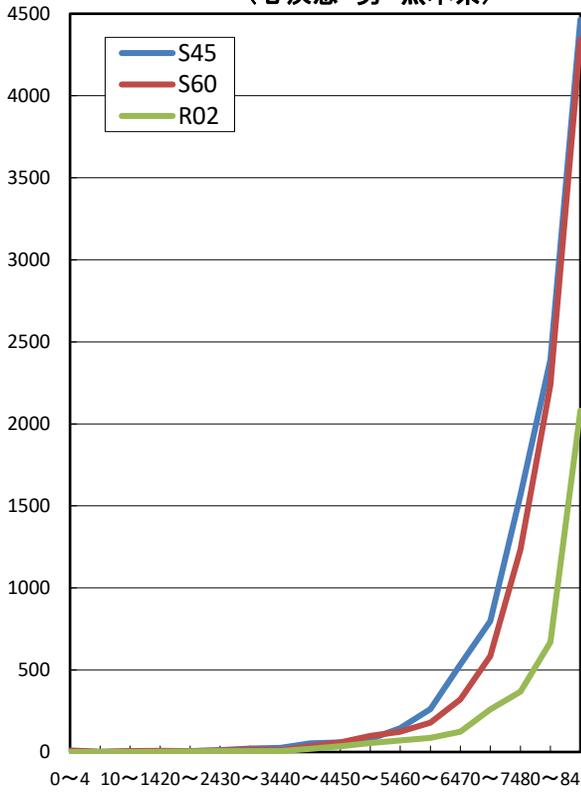
心疾患、脳血管疾患は年次別にみると各年齢層とも大幅に低下している。

なお、心疾患の減少については、平成7年に行われた死因分類及び死亡診断書の改正の影響によるところが大きいと考えられる。

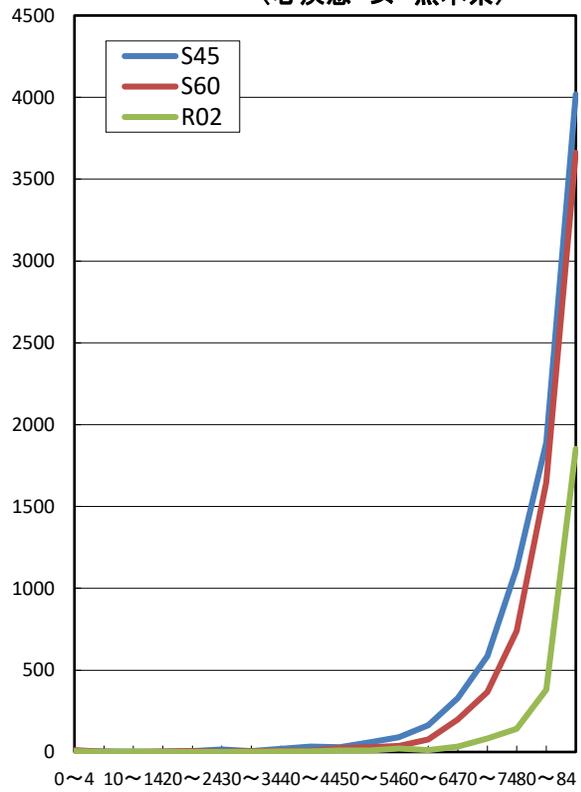


資料) 厚生労働省「人口動態統計」

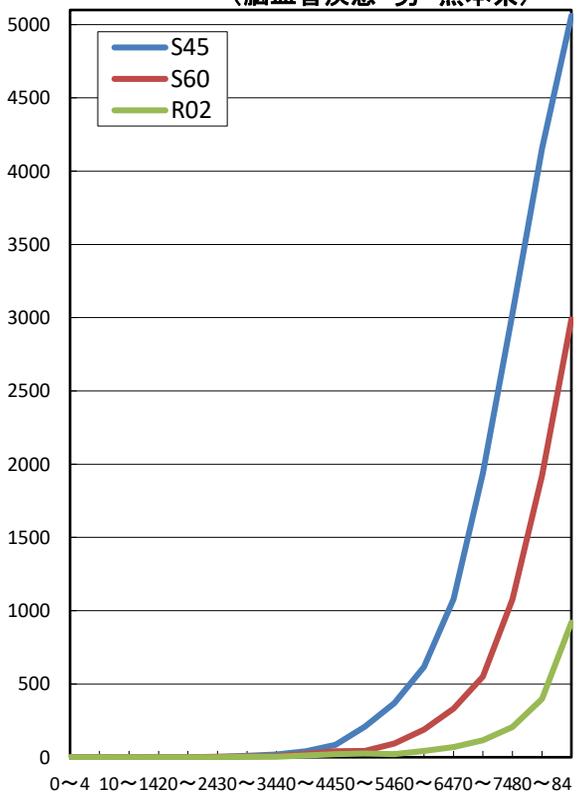
死亡率
(人口10万対) **年齢階級別死亡率の年次比較
(心疾患 男 熊本県)**



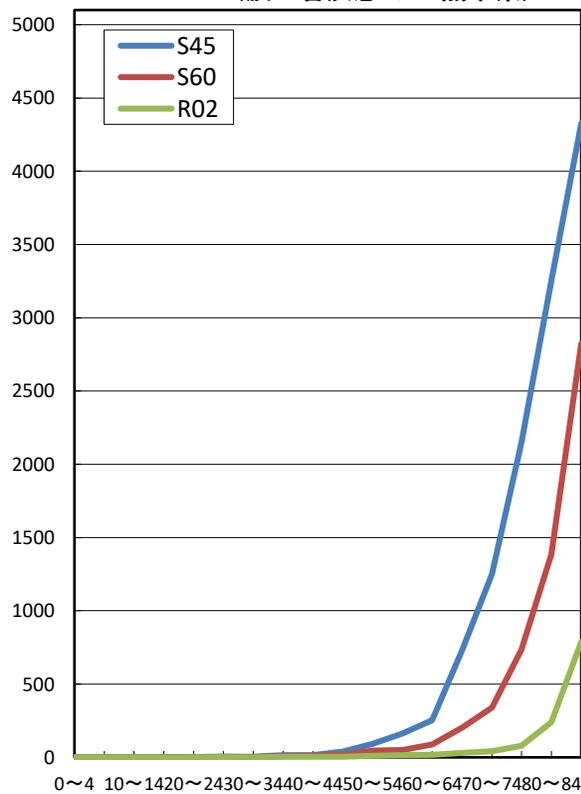
死亡率
(人口10万対) **年齢階級別死亡率の年次比較
(心疾患 女 熊本県)**



死亡率
(人口10万対) **年齢階級別死亡率の年次比較
(脳血管疾患 男 熊本県)**



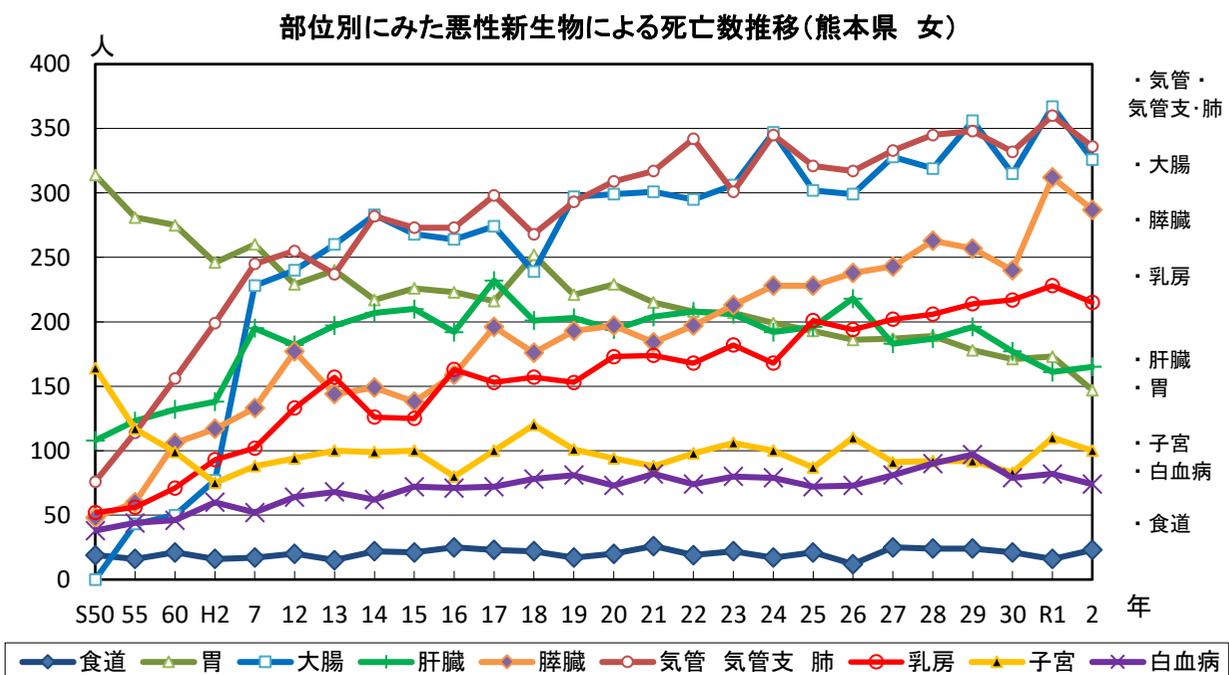
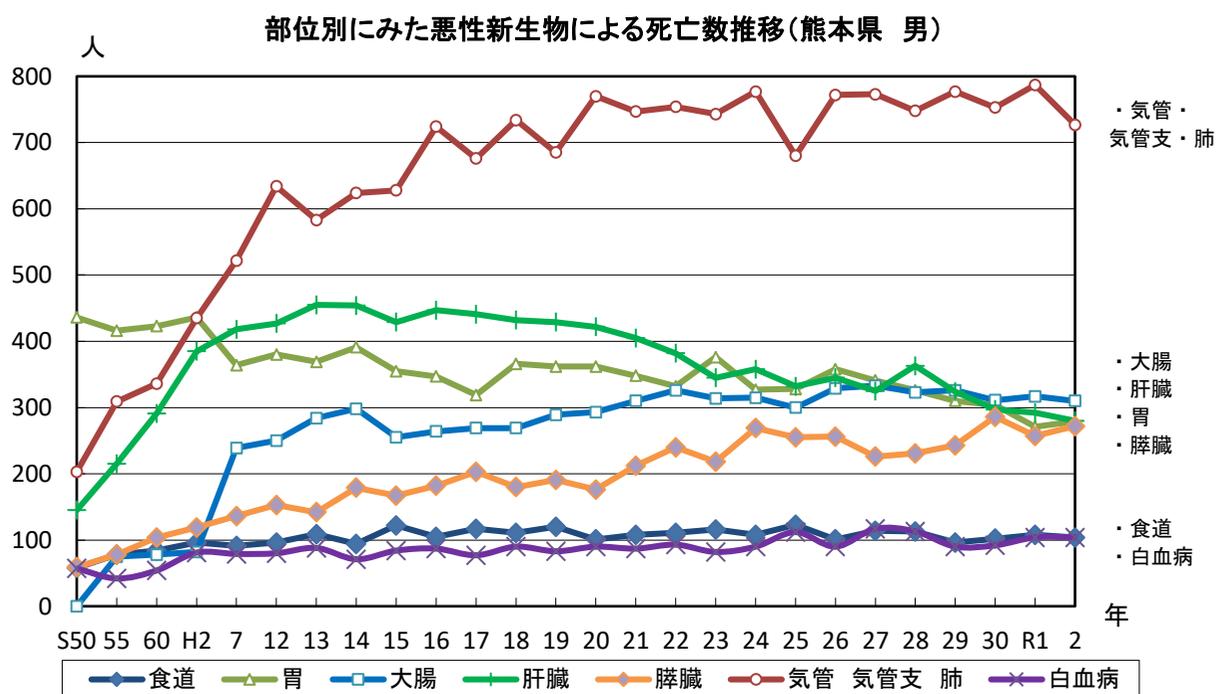
死亡率
(人口10万対) **年齢階級別死亡率の年次比較
(脳血管疾患 女 熊本県)**



資料) 厚生労働省「人口動態統計」

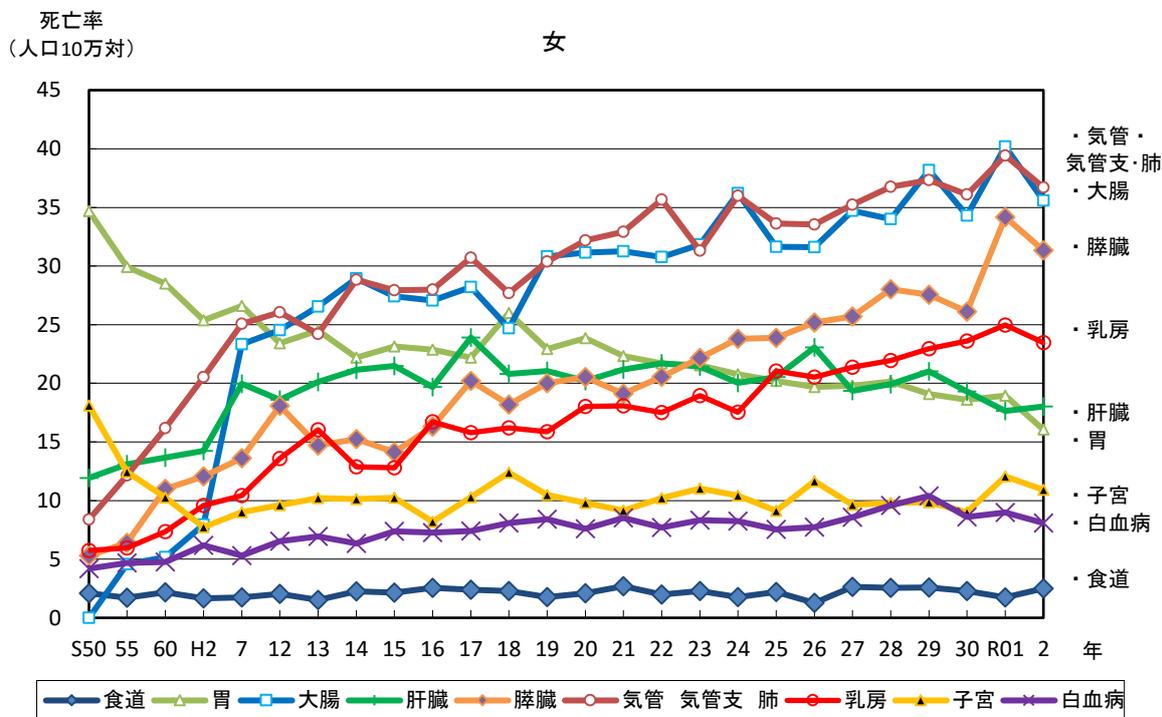
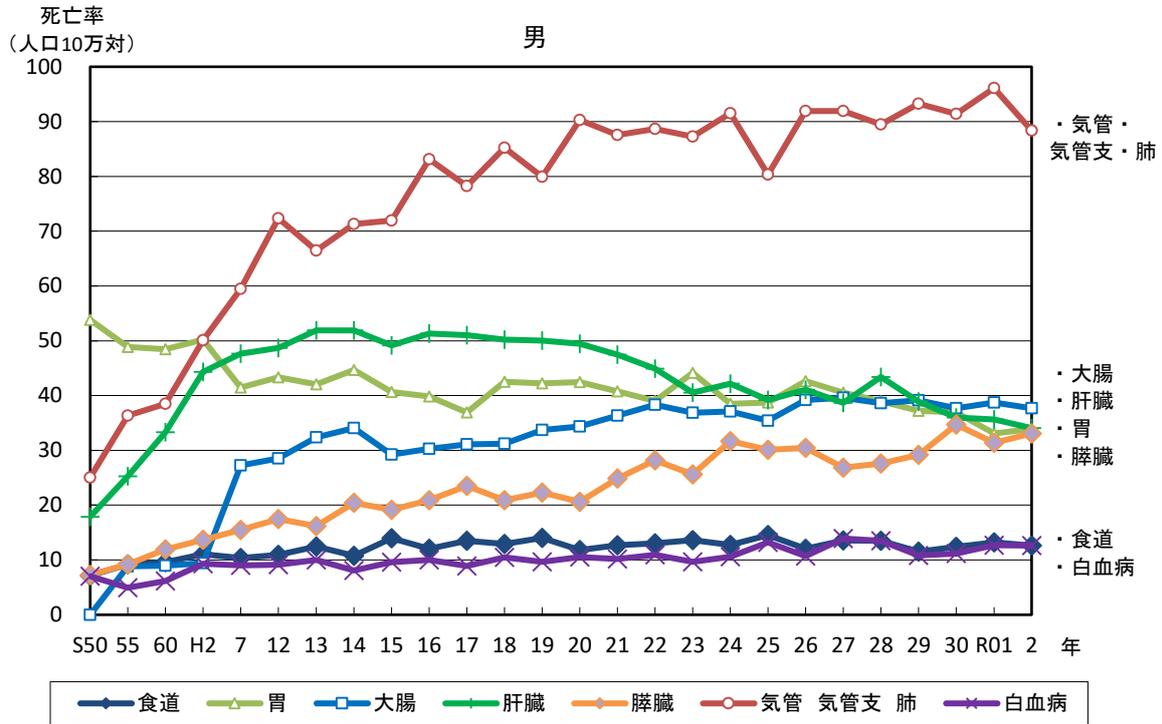
(12) 男女ともに気管・気管支・肺がんが最多（部位別）

本県の悪性新生物の部位別の死亡数を年次推移で見ると、近年、男は気管・気管支・肺がんが最多である。女は令和2年は、気管・気管支・肺がんが大腸がんを上回って最多だった。



資料) 厚生労働省「人口動態統計」

部位別にみた悪性新生物による死亡率の推移(熊本県)

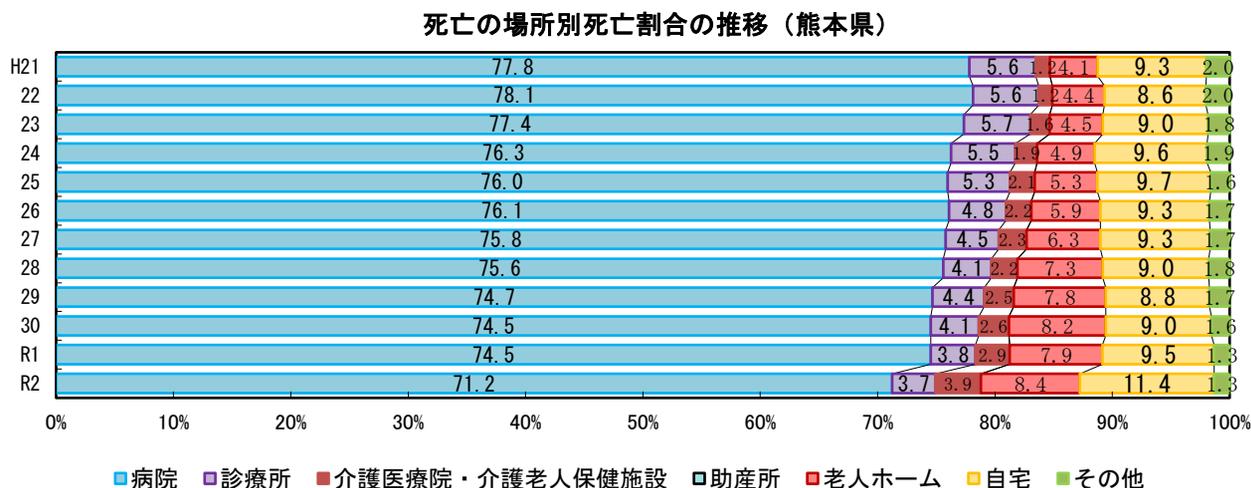


資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(13) 医療機関での死亡は74.9%

死亡の場所別死亡割合の年次推移をみると、「病院」における死亡は、令和2年は71.2%で前年より3.3ポイント減少し、「自宅」における死亡は11.4%で前年から1.9ポイントの増加となった。

また、令和2年の「介護医療院・介護老人保健施設」（※平成30年から介護医療院が追加）における死亡は3.9%で前年より1.0ポイント増加、平成7年から死亡場所の分類に追加された「老人ホーム」は8.4%で、前年より0.5ポイント増加となった。



資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(14) 高齢者の家庭における不慮の事故は、「転倒・転落」が152人で最多

家庭における不慮の事故の種類別にみた65歳以上の死亡者数をみると、令和2年は転倒・転落によるものが152人、その他の不慮の窒息によるものが145人、不慮の溺死及び溺水によるものが93人であった。

家庭における不慮の事故の種類別にみた65歳以上の死亡者数

死因分類コード	死 因	65歳以上の死亡者数
V01-X59	不慮の事故 ※	608
W00-W19	転倒・転落	152
W01	スリップ、つまずき及びよろめきによる同一平面上での転倒	124
W10	階段及びステップからの転倒及びその上での転倒	12
W13	建物又は建造物からの転落	1
W65-W74	不慮の溺死及び溺水	93
W65	浴槽内での溺死及び溺水	74
W66	浴槽内への転落による溺死及び溺水	1
W75-W84	その他の不慮の窒息	145
W78	胃内容物の誤嚥	22
W79	気管支閉塞を生じた食物の誤嚥	75
W80	気管支閉塞を生じたその他の物体の誤嚥	41
X00-X09	煙、火及び火災への暴露	12
X00	建物又は建造物内の管理されていない火への暴露	8
X05-X06	夜着及びその他の着衣及び衣服の発火又は溶解への暴露	-

注) ※家庭における不慮の事故以外の不慮の事故を含む。

資料) 厚生労働省「人口動態統計」